『ひとの目，驚異の進化』

マーク・チャンギージー（著），2012 年，インターシフト，東京．

先日，学生時代の恩師と会う機会がありました。ほぼ10年ぶりです。その席でまったく予期せぬことばを頂いたんです。「あなたのとんでもない発想にはいつも感心していたんや」。感心してくれていたのならその時にそう言ってくれればよかったのに！！！とは思いつつも，評価してもらえていたことを10年以上経って知り，ずっと心の奥底にあった重たいものがなんだか軽くなった気持ちがしました。

学問というものは過去の研究の蓄積の上に成り立っています。ですので，独創的な研究といってもそのほとんどの場合は先行研究の部分修正や上乗せにすぎません。基本的には先人たちが残した登山ルートを登ることになるんです。ところが，院生時代の僕はこれに従わなかったんです。理由は単純です。それでは“つまらなかった”からです。もちろん，だからといって，先人たちを無視して，一から理論を作り上げるほどの独創性（独走性）は発揮していません。というか，できませんでした。登る山も登る方法も先人たちに従いますが，異なった新たな登山ルートを開拓したかったんです。新しい景色が見たかったんですね。そしてそれこそが僕にとって研究を生業とすることの意義だったんです。でも，学生を指導する立場になってわかったんですが，“つまる”とか“つまらない”とかで研究をやってはいけませんよね。伝統的な登山ルートを登るようにその恩師から何度も言われたのを覚えていますが，教育者としては当然の指導だったと思います。

本書は，まさに“とんでもない発想”の書です。例えば，なぜヒトはカラフルな色覚を発達させたのか？という問いに対する従来の登山ルートは，果物の色を判別するため。なぜ私たちは前向きの二つの目を持っているのか？という問いに対する伝統的な登山ルートは，獲物を捕らえるため，立体視するため，などですよね。でも，著者はとんでもない登山ルートを新たに提案してくれます。そしてその登山ルートからはこれまでとは全く異なった進化の風景が見えてくるんです。これらに加え，錯視の原因や文字の発達についても同様の“とんでもない発想”で読者をわくわくさせてくれます。学問をやっていると批判精神とか独創性とかをとやかく言われることが多いですが，なかなか本物の批判精神とか独創性には出会えません。一部の天才は別格として，本書には，僕らのような凡人研究者が目指すべき批判精神や独創性の手本があるような気がします。「進化の文脈で視覚を調べて初めて，私たちの力の本質について目覚ましい発見が可能になる」(p.274)とは著者の言葉ですが，これを僕の専門に照らしてみると，「進化の文脈でことばを調べて初めて，私たちの力の本質について目覚ましい発見が可能になる」ということになります。言語分析においても進化の視点が必要であることはたびたび指摘されていますが，根本からもっと積極的に進化の視点を取り入れられれば，もっとわくわくする研究ができそうな予感です。

最後に一言。本書は推理小説のように読めるところが一つの魅力なのでしょうが，せっかちな人にとってはかなりまどろっこしいでしょうね。そういう人は，巻末の「解説」を見るだけでコンパクトに筆者の主張がつかめます。ただ，「解説」を先に読んでしまうとネタバレで推理小説の醍醐味が半減してしまいますが。（文責:町田章　2018 年 4 月 17 日）